

昭和小学校 「学力向上実行プラン」

研究テーマ

- ①「アクティブラーニングの視点に立った、わかる授業の工夫・実践」
- ②「児童の聞く力・表現する力の育成」

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 3学年主任 荒井 佳代	管理職 校長:新田 恭一 教頭:松永 健治
	委員 6学年主任:川口 能史 5学年主任:原田 三知子 4学年推進員:中内 悠久哉 2学年推進員:西野 瞳 小松 咲 1学年主任:伊藤 恵子

校長
新田 恭一 印

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣がつき、基本的な漢字の読み書きや四則計算が定着してきている。	宿題や学習課題に確実に取り組み、基礎的・基本的な知識・技能が習得できる。	高学年は全国学力調査・ステップアップテストで平均正答率を県平均以上にする。 低学年は国語・算数の単元テストの目標達成率(平均点が80点以上の児童の割合)を80%以上にする。	左記の取り組みを継続して進めるとともに、確認テストのための時間確保や様々な問題を解くための機会の確保に努める。	①全ての教員が、板書を工夫し、ノート指導を定期的に行うことができた。 ②全ての教員が、確認テストを定期的に行い、様々な問題を解く機会を多く設けることができた。	・6年生の全国学力調査は、国語・算数共に平均正答率が県平均以上であった。5年生の秋のステップアップテストでは、算数が県平均を1.3%下回った。 ・低学年は目標達成率が84%で成果指標を達成できた。
課題 学力に二極化傾向がみられ、各学年に学力の低い児童が数名いる。下位層では、学習に取り組む日頃の態度なども、基礎学力の定着に関係していると思われる。苦手意識が基礎学力に大きく反映して、学習意欲の向上が課題である。	具体的方策(教員の取組) ①ICT機器等を活用しながら分かりやすい板書を工夫し、問題解決の流れにそったノートがとれるような指導を行う。 ②ドリルやスキル学習に継続して取り組む時間を確保し、特に間違いやすい内容は学習ガイドなどをより活用し様々な問題を解く機会を多く設ける。	取組指標 ①「板書を工夫し、ノート指導を定期的に行っている」(自己評価)の割合を90%以上にする。 ②「児童の実態に合わせた内容の確認テストを定期的に行い、様々な問題を解く機会を多く設けている」(自己評価)の割合を80%以上にする。		評価 B 次年度における改善事項 ・教員の意識が昨年度よりもさらに向上し、児童の学力向上につなげることができた。次年度も引き続き取組を進める。 ・高学年は成果指標をほぼ達成することができた。次年度は、ステップアップテストにおいて正答率が県平均を下回った教科・領域について、学習ガイドなどをさらに活用し、引き続き様々な問題を解く機会を多く設ける。 ・低学年も成果指標を達成することはできなかったが、全体的に国語の目標達成率が算数よりも低かった。パワーアップタイムなどの時間を計画的・継続的に活用し、国語の基礎基本の定着にさらに取り組む必要がある。	

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ スキル学習(話す・聞く)を生かしながら、与えられた表現の場で、積極的に自分の考えを表現したり伝え合おうとしたりする態度がよく見られるようになった。	話し手の言いたいことを考えながら聞き、目的や相手に応じて進んで自分の考えを根拠を示しながら表現することができる。	国語科における「読む力」・算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率の到達目標を、各学年の発達段階に応じて設定し、達成できた児童を70%以上にする。	引き続き、考えの根拠を捉えたり示したりしながら話し合う活動を推進する。また、考えを書く活動を短時間でも継続して取り入れ、思考力・判断力・表現力を高める。	①取組指標にあるような話し合い活動を、積極的に取り入れていると自己評価した教員は95%で目標達成した。 ②書く活動の取組指標について、できていると自己評価した教員は100%で、目標を達成できた。	・国語科における「読む力」・算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率の到達目標を達成できた児童は83%で、成果指標を達成することができた。
課題 決められた手順のない場では、スキル学習(話す・聞く)の成果が十分に発揮されていない。理由や解決方法などの自分の考えを、自ら進んで表現することに対し苦手意識を持っている児童が多く、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率が低い傾向がある。	具体的方策(教員の取組) ①話し合いの場を積極的に設け、多様な意見や考えが生まれるような学習課題を設定し、話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりさせる。 ②学習活動の中にも書く活動を取り入れ、自分の考えを深め、まとめる機会を積極的に設ける。	取組指標 ①「話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えの根拠を明確にして話したりする話し合い活動」(自己評価)の割合を80%以上にする。 ②「書く活動を取り入れ、自分の考えを深め、まとめる機会を積極的に設けている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価 A 次年度における改善事項 ・全体としては成果指標を達成することができたが、算数科における「数学的思考力」を評価する問題の正答率が、高学年で低い傾向があった。算数の授業における、自力解決の場や練り上げの場の保障と充実に重点をおいた授業改善に取り組む必要がある。 ・引き続き、各教科において書く活動の充実を図るとともに、ペアやグループ活動による伝え合い学び合う学習を推進する。	

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ ドリル学習やスキル学習に取り組む習慣は定着している。好んで本を読む児童の割合も増加している。	進んで学習に取り組む、学ぶ楽しさやわかる・できる喜びを感じることができる。	自主的に学習に取り組んだ児童の割合を80%以上にする。(自己評価カード)	定期的に家庭学習について指導・点検する機会を設け、その際に家庭学習の手引きを繰り返し活用する。また、参観授業や懇談の機会を捉えて家庭への啓発を続ける。	①③はできていると自己評価した教員が90%以上だったが、②は63%と目標に届かなかった。	・81%の児童が、学校や家庭で進んで学習に取り組むことができたとして自己評価している。
課題 決められた課題には取り組むが、主体的に学習に取り組もうとする態度は育っていない。また、家庭学習の手引きが積極的に生かされておらず、家庭での学習・読書習慣が十分に定着していない。	具体的方策(教員の取組) ①授業に児童の主体的な体験や活動を積極的に取り入れる。 ②家庭学習の手引きの活用を繰り返して指導すると共に、参観授業や学年懇談・学年便りなどの機会を捉えて保護者への啓発を図る。 ③学級文庫の充実と朝の読書タイムの時間確保に努め、家庭での読書習慣の定着につなげる。	取組指標 ①「授業に児童の主体的な体験や活動を積極的に取り入れている」(自己評価)の割合を85%以上にする。 ②「家庭学習の手引きを活用して、家庭学習の取り組み方について指導している」(自己評価)の割合を90%以上にする。 ③「読書指導を積極的にしている」(自己評価)の割合を90%以上にする。		評価 B 次年度における改善事項 ・家庭学習の手引きの活用が十分にできていないことが、昨年度に引き続き課題である。次年度は、有効な活用方法の模索のみならず、根本的なところから見直していくことも必要である。家庭学習の手引きの内容自体に活用しづらい点はないか検証する、活用の仕方を校内研修等で話し合うなど、各家庭の協力をいっそう得られやすいように改善していく。	

平成29年度 学力向上ロードマップ



